

ジョゼフ＝シャルル・マルドリュスの手稿『カルネ』の翻刻プロジェクト

Le projet de déchiffrement des *Carnets* manuscrits de Joseph-Charles Mardrus

小田 淳一 (Jun'ichi ODA)、Célia CHEURFA、Lahcen DAAÏF

Cet article que nous proposons de rédiger se veut un rapport liminaire sur notre projet, sous le patronage de JSPS KAKENHI (Numéro de subvention : 20K00492). Ce projet est entièrement dédié au déchiffrement et à l'analyse des *Carnets* inédits conservés actuellement à la Bibliothèque nationale de France (BnF), que Joseph-Charles Mardrus (1868-1949) avait rédigé de sa propre main. Nous avons eu l'autorisation de son héritière légitime (la regrettée Madame Marion Chesnais) à titre exclusif sur ces *Carnets* ainsi que d'autres documents du fonds Mardrus, sous forme de contrat établi avec le Musée national d'ethnologie (Osaka, Japon). Mardrus qui était un médecin reconnu, était aussi le traducteur célèbre des contes des *Mille Nuits et Une Nuit* publiés à la «Belle Epoque», œuvre par laquelle il a dominé son époque. Dans la mesure où ses *Carnets* se présentent comme un mémorandum à usage personnel, leur déchiffrement constituera une étape préliminaire à une étude plus poussée des divers aspects de sa vie intellectuelle et de ses activités variées en matière de traduction. En tant que tel, l'analyse de ses *Carnets* a également pour objectif de mettre en avant ses compétences désormais incontestables en langue arabe, et de faire taire les contestations de certains contradicteurs qui doutaient de sa maîtrise de cette langue. C'est hélas encore le cas de nos jours comme autrefois quand il faisait l'objet des critiques de quelques jaloux alors qu'il était adulé par d'autres parmi les hommes de culture les plus illustres à Paris, au sein d'un climat littéraire florissant. De plus, par ces *Carnets*, nous projetons également de mettre en lumière aussi bien sa stature intellectuelle dont il jouissait à cette époque que ses nombreuses relations qu'il avaient nouées avec des hommes de lettre et des artistes de renom.

キーワード：ジョゼフ＝シャルル・マルドリュス (Joseph-Charles Mardrus), 『千夜一夜物語』 (*Les Contes des Mille Nuits et Une Nuit*), ベル・エポック (Belle Epoque), オリエンタリズム (Orientalisme), 『クルアーン』 (Coran)

1. はじめに

本稿は《ベル・エポック》のパリで一世を風靡した『千夜一夜物語』フランス語版(1899-1904)の翻訳者であるジョゼフ＝シャルル・ヴィクトル・マルドリュス (Joseph-Charles Victor Mardrus 1868-1949) が遺した様々な資料のコレクションについて、筆者(小田)が2003年に本誌で発表

した「マルドリユス・コレクションに関する予備調査報告」¹の続編に相当するものである。その予備調査の後、2008年にマルドリユスの当時の法定相続人であった故マリオン・シェネ（Marion Chesnais 1935-2016）氏と日本の国立民族学博物館（大阪）との間で資料のデジタル化と独占的使用の許諾契約が交わされた。そして2008年10月及び2009年10月にその許諾に基づき旧マルドリユス邸において、国立民族学博物館共同研究員であった筆者も参加して資料のデジタル化作業が行われ、そのデータを元にコレクションのカタログが2022年3月に出版された²。

本稿はそのコレクションに含まれている未公開の手稿『カルネ』4点³の翻刻と分析を行うプロジェクト⁴について、現時点で得られた幾つかの知見を述べる中間的な報告である。『カルネ』はマルドリユスが執筆活動を行うための私的な覚書に類したもので、百科事典的な記事や『クラーン』などから引かれた多くのアラビア語、またその他の様々な記述から成っている。それらの翻刻と分析を目的とする本プロジェクトは、マルドリユスの多彩な文筆活動の背後に存在した知的情報資源の構造的特徴や、従来疑問視されてきた彼のアラビア語能力についての客観的な証拠、さらには彼と交流があった様々な作家・芸術家に関わる記述を明らかにすることによって、未だに不明な部分が多いマルドリユスに関する研究全体を補完するものと位置づけられよう。

2. 『カルネ』の概要

2.1. 形状

『カルネ』は4点から成りそれらの形状は表1に示す通りである。「整理番号」はNishio *et al.* (2022)において『カルネ』に用いられている *cote* をそのまま記した。表内に総ページ数を入れないのはマルドリユスが振ったページ番号が必ずしも正確な並び順ではない可能性があるためであり、本稿ではページ数の代替データとして、デジタル化した際の画像ファイルを整理して振り直した「画像識別子」を用いる。

表1：『カルネ』の形状

タイトル	整理番号	サイズ (mm)	画像識別子
Carnet A	M0001	110×170	001~178
Carnet B	M0003	110×170	001~118
Carnet F.G.H	M0004	130×203	001~029
Carnet E	M0006	53×108	001~045

¹ 小田淳一 (2003)：「マルドリユス・コレクションに関する予備調査報告」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』18, pp. 163-175.

² Nishio *et al.* (2022)： *Catalogue du fonds Joseph-Charles Mardrus, traducteur des Mille Nuits et Une Nuit, Abencerage.*

³ マリオン・シェネ氏の死去に伴ってコレクション全体がパリのフランス国立図書館に移管されて現在整理中であり、当館のリポジトリ (Gallica) で公開されるまでにはまだ数年を要するものと思われる。

⁴ このプロジェクトは2020年度から科学研究費助成事業 (基盤研究 (C) 課題番号 20K00492) の助成を受けており2025年3月に終了予定である：「ジョゼフ＝シャルル・マルドリユス遺贈未公開手稿カルネの翻刻と分析」。

2.2. 書かれた時期

Carnet A と Carnet B の見返し遊び部分にはサン＝ジェルマン大通りの住所 (202 Bd St-Germain) が書かれており、このことから『カルネ』が書かれた最も早い時期はマルドリユスとそのアパルトマンに越してきた 1916 年にまで遡ることができる。『カルネ』に書かれた様々な内容の執筆時期については、時折貼り付けてある新聞や雑誌の記事に年月日が含まれていたり、あるいは言及している書籍の出版年が明記されていればそれらを参考にすることができるが⁵、それぞれの記事について正確な執筆時期を特定するのは困難であろう。なお Carnet A の見返し遊び部分にはローマ数字の「I」、そして Carnet B の見返し遊び部分には「III」が書かれており、その間の「II」が記されているのは Carnet A_099 である。このことから Carnet A と Carnet B の間に時系列上の前後関係が存在することは確実であるが、その 2 点と Carnet F.G.H 及び Carnet E との時系列関係について何らかの判断を行うには個別的な記述の執筆時期の特定と同様、テキストのさらなる精査を必要とするだろう。

2.3. 使用言語

それぞれの『カルネ』で用いられている主な言語は次の通りである。

Carnet A : フランス語。アラビア語 (約 90 箇所⁶)。ヒエログリフ (1 箇所)。

Carnet B : フランス語。アラビア語 (約 50 箇所⁶でいずれも前半部分に集中している)。ヒエログリフ (4 箇所)。

Carnet F.G.H : フランス語。アラビア語 (1 箇所)。

Carnet E : アラビア語。フランス語 (対訳として用いられている)。

2.4. 書かれている内容

それぞれの『カルネ』で書かれている内容について詳細な解説はまだ行っていないが、全体を概観して得られた大まかな内容と、特徴的であると思われた記述を以下に示す。

Carnet A : 紳士録に掲載されたマルドリユスの経歴部分をそのまま切り取って貼付。マルドリユスの著作である *Toute-puissance de l'adepte* (1932) 『アデプトの全能』のテキストと同一の箇所。断片的なメモ (エジプト関連、魔法や錬金術、秘教哲学、音楽論、イスラム教の宗派)。書籍からの引用。送った書簡の写し。語彙の対訳 (英語／フランス語)。

Carnet B : 広範なテーマについての断片的なメモ (エジプトを含む中東世界、スーフィズム)。科学関連のメモ (音速や光速、色彩や風の分類、膨張現象)。医学の諸概念 (衛生、治療や長寿、死生観等) と古代エジプトやイスラムとの関連付け。

Carnet F.G.H : 世界の宗教や人種の分類、インドの諸言語。イスラム教についての多くの断片的

⁵ 例えば Carnet A_030 には小型の日めくりカレンダーが一枚挟んであり (マルドリユスの筆跡でメモが書かれている) 日付は 1941 年 1 月 15 日である。

⁶ この「箇所」は当該言語が、異なる言語の中で孤立的に (語として)、あるいは連続して (連辞や文として) 用いられている範囲を単位としているため、語数などの「量」を示すものではない。

なメモ。秘教の心理学的側面（心霊術や魔術等）。宝石の詳細な分類。

Carnet E : 『クルアーン』からの多くの引用とそれらのフランス語訳。出典が明記されていないアラビア語の語彙とそれに対応するフランス語。

3. 『カルネ』の分析

3.1. 構造的特徴

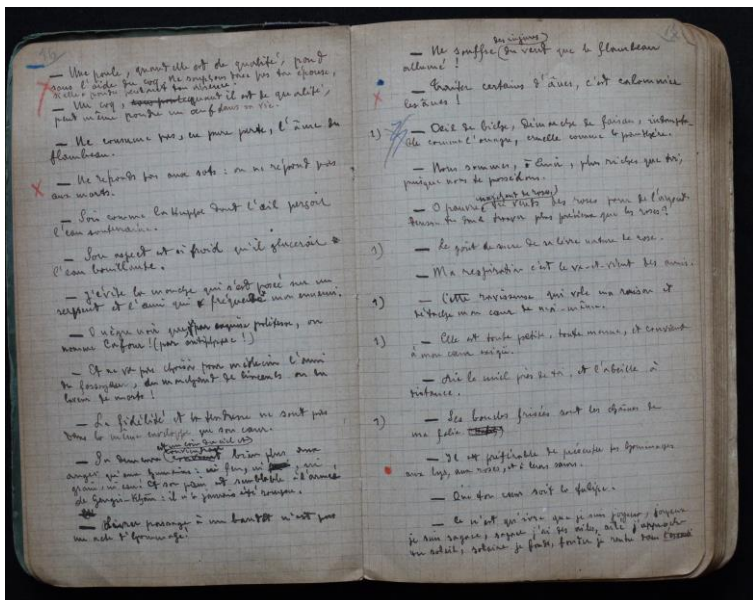


図 1 : Carnet A_011

『カルネ』に書かれている記述は当然、マルドリユス本人が書いたテキストか、あるいは彼以外によって書かれたテキストからの引用である。引用されたテキストについては出典が明示されている場合もあるが参照情報がしばしば巻号とページのみで、それが『カルネ』を指しているのか、あるいは既に挙げられている書籍なのか判然としないケースが多く、それらについては今後さらに精査を行う予定である。

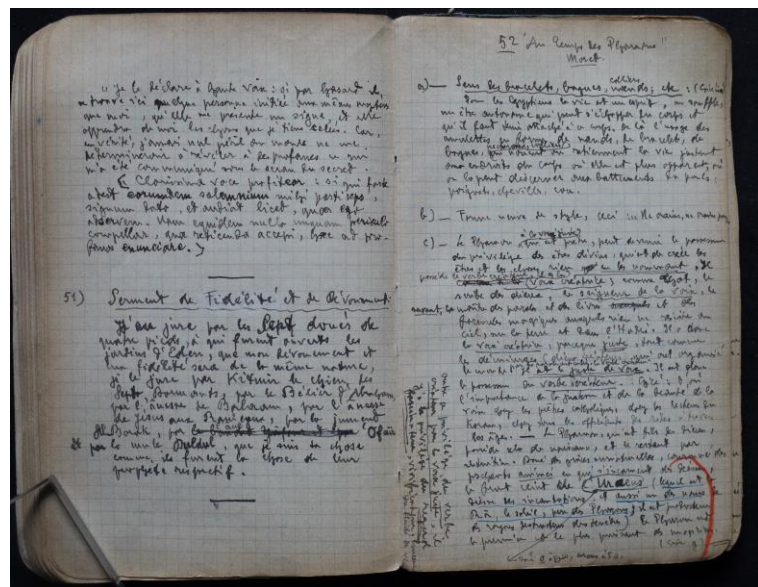


図 2 : Carnet A_156

『カルネ』の構造的な特徴としてまず挙げられるのは、図 1 (Carnet A_011) のようにティレの後に比較的短い文（長くても数行）が連続している部分が多いことである。しばしば「見出し」のような語のあとに短い文が続く場合もあり、その時はその語を言わばテーマとして文の間に関連性が認められることが多いものの、必ずしもそうではない例もある。

また図 2 (Carnet A_156) のように通し番号や記号が振られて記述が階層構造化されている箇所が多く見られる。左ページの「51)」は Carnet A_099 から

始まる『カルネ』の言わば第 II 巻 Divers (雑記) の通し番号で「52」からはエジプト学者アレクサンドル・モレ (Alexandre Moret 1868-1938) による『ファラオたちの時代』⁷の概要が下位層 (a から c) を構成し、それが次画像の A_157 の「h」まで続くが、そこでさらに下位の層 (1 から 5)

⁷ Moret, A. (1908) : *Au temps des pharaons*, Armand Colin.

が置かれる。その後「53」の雑記が「1)」から「11)」まで続くがそこで再び下位層が設定されて a)、b) ...と記号が振られている。「53」の雑記で扱われている内容は芸術史、パストゥールのアカデミー・フランセーズ受諾演説(1882)、パスカルの宗教観、ウロボロスの蛇など種々雑多である。

このように『カルネ』の構造は、内容的に相互関係がほぼ認められない短い断片の集合と、あるテーマに基づいて階層構造化された部分に大別されるが、後者については途中で通し番号が途切れたり、番号や記号が重複したり、階層のレベルが混乱していたりと必ずしも最適化されていない。しかし『カルネ』はそもそも「覚書」であったことからテキスト構造が不明確であるのは致し方のないことであり本節ではその件についてはこれ以上触れないが、今後「不明確な」構造を(後述するように)利用してマルドリユスの思考パターンに還元させることを予定している。

3.2. マルドリユスのアラビア語能力

マルドリユスのアラビア語運用能力については当時から中東研究者に疑問視されていたが、そもその発端は彼が「完訳」かつ「忠実な訳」⁸と謳った『千夜一夜物語』フランス語訳がどのアラビア語テキストに依拠したのかが不明確だったことによる。『千夜一夜物語』全16巻が刊行された直後の1905年にヴィクトル・ショーヴァン(Victor Chauvin 1844-1913)は幾つかの物語の元テキストについて疑問を投げかけ、マルドリユスはそのアラビア語テキストを持っているのであればそれらの刊行を期待すると述べている⁹。このように原典の不明性に加えて性的な描写が多い彼の『千夜一夜物語』が文学界や芸術界の多くの人々から絶賛されたことが、彼のアラビア語能力を含めて、一部の中東研究者の疑義を招くことになったのであろう。本稿は私的なメモである『カルネ』の中で用いられているアラビア語の分析によってマルドリユスのアラビア語能力が実際にはどの程度のレベルであったのかについて幾つかの知見を得た¹⁰。Carnet E は表紙に Notes arabes (アラビア語ノート) と書かれ、『クルアーン』の章句や語彙がそれらのフランス語訳と共に記されている。例えば図3は Carnet E_003 に記された『クルアーン』第83章33節である。

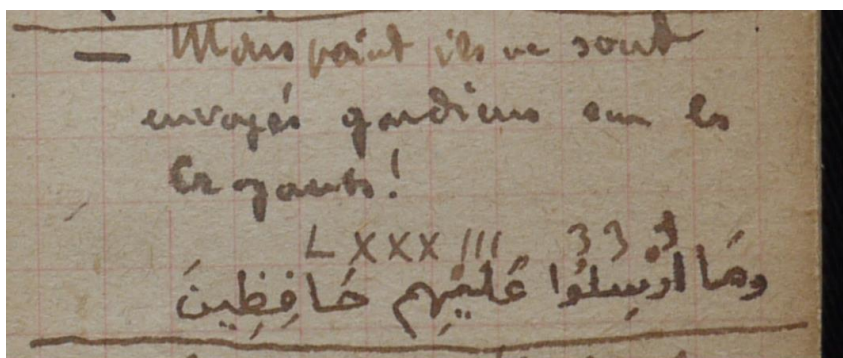


図3: Carnet E_003 『クルアーン』第83章33節

⁸ Mardrus, J.-C. (1899) : *Le Livre des mille nuits et une nuit*, Revue Blanche, p. xx.

⁹ Chauvin, V. (1905) : « Les Mille et une Nuits de M. Mardrus », *Revue des bibliothèques et archives de Belgique*, Tome III, fasc. 4, p. 292.

¹⁰ それらの知見に基づく報告が共著者のひとりであるラハセン・ダーイフによってリヨン第2大学の年度末合同報告会(2022年7月12日)「Projet, événement et chantier en cours concernant les études arabo-islamiques」において口頭で行われた。

— Mais point ils ne sont envoyés gardiens sur les Croyants !

LXXXIII、 33

وَمَا أَرْسَلُوا عَلَيْهِمْ حَافِظِينَ

第 83 章 (アル=ムタッフイフイーシ 量を欺くもの) 33 節

「彼らは、彼ら [信じる者] を監視する者として遣わされたのでもないのに¹¹。」

図 3 が示すようにマルドリユスは『クルアーン』の章句についての知識があり概ね正しいアラビア文字による正書法を用いているが他の箇所にも書記上の誤用が認められた。それは「アリフ (ل) の上のハムザ (ء)」であり、ここでは Carnet E_021 に記された『クルアーン』第 2 章 45 節¹²の例を図 4 に示す。『クルアーン』では واستعينوا (Wa-sta'īnū [助けを求めなさい]) と、アリフの上にハムザは置かれず声門閉鎖音が消失する「連結ハムザ」(ハムザト・アル=ワスル) となっている。一方マルドリユスは وأستعينوا (Wa-Asta'īnū) と、アリフの上にハムザを置いて (四角内) 声門閉鎖音が発音される「切断ハムザ」(ハムザト・アル=カトウ) として書いている。マルドリユスが何故このような書記上のミス (『カルネ』の他の箇所にもある) を犯したのかということ、当時のアラビア語教育ではハムザを至る所に置いていたからであり、真面目な生徒であったマルドリユスはその同じミスを後年も繰り返していたことになる。他の部分のアラビア語を確認した限りではマルドリユスのアラビア語能力に問題となるような欠陥があったとは言えず、その書記上のミスは、音声レベルでは A を発音せずに省略できるという「連結ハムザ」が当時のフランスやヨーロッパ各国で知られておらず不要な箇所にもハムザを書いていたことによるのである。

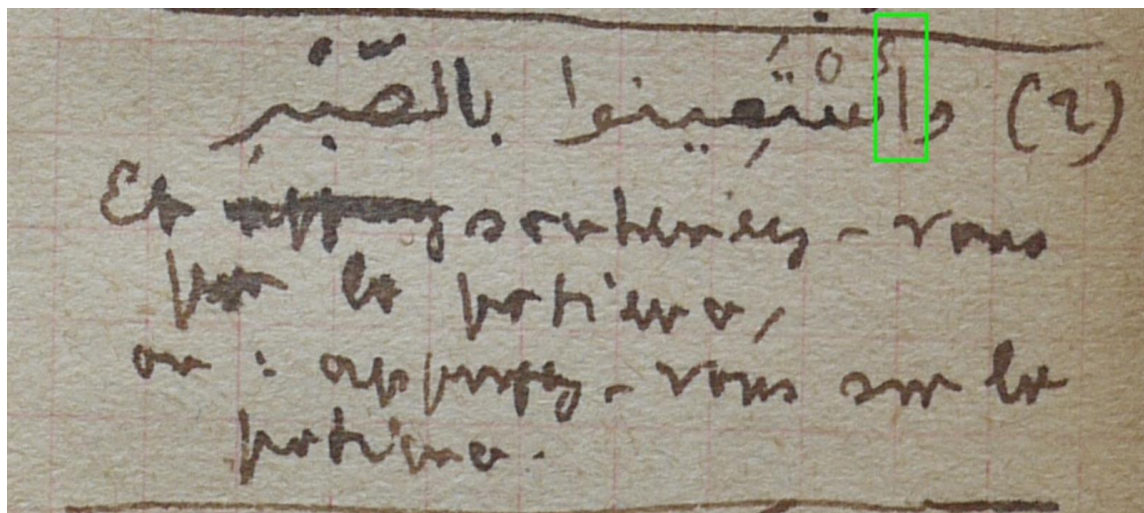


図 4 : Carnet E_021 『クルアーン』第 2 章 45 節 (部分)

¹¹ 『クルアーン』の訳はクルアーン日本語読解制作委員会の『クルアーン 日本語読解』PDF 版 (東京ジャーミイ出版会、2022 年 2 月 1 日) による。

¹² 第 2 章 (アル=バカラ 雌牛マディーナ啓示) 45 節「忍耐と礼拝をもって助けを求めなさい。本当に、それは畏怖する者でなければ難しいこと」。マルドリユスが引いているアラビア語部分は当該節の最初の文であり、ou で二案のフランス語訳を示しているのはさらにその前半部分のみである。Et soutenez-vous par la patience, ou : appuyez-vous sur la patience.

ここでマルドリユスのアラビア語能力が、「連結ハムザ」は知らなかったものの他の点において「かなり」高かったと結論付ける前に再検討すべき点がひとつある。それは「シャクル（発音記号）の振り方」についてである。マルドリユスが口語のエジプト方言については母語に近い能力を有していたことは衆目の一致するところであるが、『カルネ』で用いているアラビア語のほぼすべてに「ところどころ」母音符号を含むシャクルを振っている。通常シャクルは初学者のためのものであり、一定レベル以上のアラビア語の知識があれば用いることはないと言われているが、マルドリユスがアラビア語の初学者であったとは勿論言えないだろう。彼が『カルネ』で用いているアラビア語の多くは『クルアーン』から引かれたものであり、『クルアーン』では正しく朗唱されるため一般にシャクルが振られていることから、マルドリユスがそのまま忠実に引用した可能性もある。いずれにせよマルドリユスがアラビア語について凡庸な知識しか持ち合わせていなかったとする説は明らかに誤りであるものの、正則アラビア語（フスハー）に精通したアラブ知識人のレベルにまでは至っていなかったというのが当面の妥当な判断であろうが、今後さらに『カルネ』で用いられているアラビア語を精査することで新たな知見を得られるものと思われる。

もとよりマルドリユスは公教育省と外務省の要請で『クルアーン』のフランス語訳¹³を刊行しているが、これに関連して興味深い事実が存在する。マルドリユスが訳した『クルアーン』は1925年10月に印刷されているが¹⁴、同じ年にジュネーヴ大学の学長を務めたエドゥアール・モンテ（Edouard Montet 1856-1934）が『クルアーン』の抄訳¹⁵を出版している。モンテの訳書については碑文・文芸アカデミーの会長を務めた東洋学者クレマン・ユアール（Clément Huart 1854-1926）が批判的な書評¹⁶を書いており、マルドリユスの訳書もマグレブ史の専門家であったシャルル＝アンドレ・ジュリアン（Charles-André Julien 1891-1991）から手厳しい批判¹⁷を受けている。どちらの訳が先に出版されたのかを調べたところ、宗教史・宗教哲学の専門誌（7・8月号）にモンテ

¹³ Mardrus, J.-C. (1925) : *Le Koran, qui est la guidance et le différenciateur*, Traduction littérale et complète des Sourates Essentielles, Fasquelle. マルドリユス訳は「完訳」ではなく全114章のうち62章しかない。

¹⁴ Stead, E. (2015) : « JOSEPH-CHARLES MARDRUS: LES RICHES HEURES D'UN LIVRE-MONUMENT », *Francofonia*, No. 69, p. 116.

¹⁵ Montet, E. (1925) : *Le Coran*, Traduction et choix de sourates, Payot. 全114章のうち20章の抄訳である。

¹⁶ Huart, Cl. (1925) : « NOTES BIBLIOGRAPHIQUES », *Revue Historique*, T. 149, Fasc. 2, PUF, pp. 270-271. 書評の中で批判的な内容は次のようなものである：タバリー（9世紀のイスラム法学者で彼のクルアーン注釈書は現在でも重要な基本文献とされている）の注釈を用いていない、古典アラビア語の起源がヒジャーズ方言であるとの誤解（正しくはネジド方言）、「カーバ神殿の偶像」は存在しない、「ヒジュラ」を「逃走」と訳している（正しくは「移住」）、「マリーク」を「師」と訳している（正しくは「審判の日の王」）等々。

¹⁷ Julien, Ch.-A. (1926) : « NOTES BIBLIOGRAPHIQUES », *Revue Historique*, T. 152, Fasc. 1 (1926), p. 117. - D^r J.-C. Mardrus. *Le Koran, qui est la Guidance et le Différenciateur*. Traduction littérale et complète des sourates essentielles (Paris, Payot, 1925, in-8°, 311 p. ; prix : 20 fr.). 【出版社名が誤って Payot になっている】

M. le D^r Mardrus, auteur d'une traduction des *Mille et une nuits* à laquelle il ne faut pas toujours se fier, a entrepris, sur la demande des ministères de l'Instruction publique et des Affaires étrangères, de mettre en français soixante-deux sourates. Les arabisants sont unanimes à reprocher au traducteur les libertés qu'il prend avec le texte. Quant au lecteur qui n'a pas de lumières spéciales, il lui sera impossible de comprendre une langue qui, à force de vouloir être archaïque et imagée, n'aboutit qu'à être obscure.

「常に信用していい訳ではない『千一夜物語』の翻訳者であるマルドリユス博士が公教育省と外務省の求めに応じて62の章をフランス語にした。アラブ研究者たちが一致して翻訳者を批判しているのはテキストの勝手な解釈である。特別な知識を持ち合わせていない読者にとって、古風で比喩的であろうとして結局は曖昧でしかない言葉を理解するのは不可能であろう」。

の訳書についての記述¹⁸がありモンテ訳の方がマルドリユス訳よりも早いことが判明した。同じ年に出版されたこれらの二つの訳書を詳細に比較することは時間の都合で本稿では断念したが¹⁹、モンテとマルドリユスの間には他の点でも共通点がある。

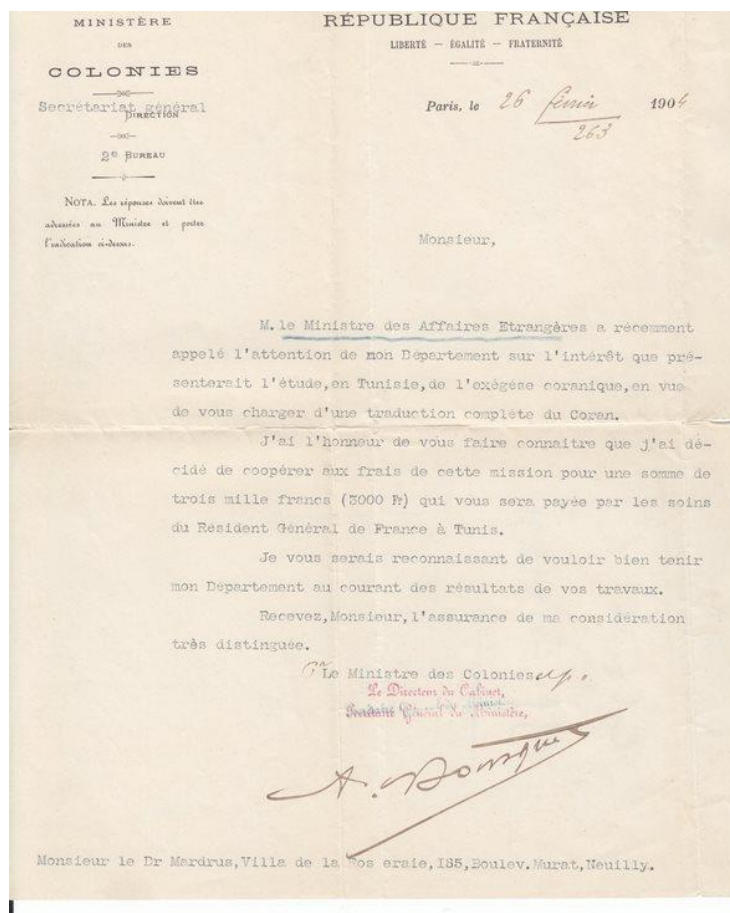


図 5：植民地大臣による通知文書

中東地域の考古学者でルーヴル美術館のキュレータでもあったルネ・デュソー（René Dussaud 1868-1958）はモンテを紹介する記事の中で彼の『クルアーン』訳がフランス語では最良の訳であると述べており、また彼がフランス政府によってモロッコに2回（1900-1901、1914）派遣されていることに触れている²⁰。一方、マルドリユスのコレクションの中に『クルアーン』の完訳をマルドリユスに依頼するため、チュニジアにおける『クルアーン』注解の研究ミッションに対して 3000 フランを支払う旨の植民地大臣による 1904 年 2 月 26 日付の通知文書（図 5）が残っている²¹。マルドリユスはその通知を受けて直ちに 3 月に妻リュシーと共に立出して翌年の 9 月までチュニジアとアルジェリアを旅行しており、そ

の様子はリュシーの『わが回想Ⅱ』²²において描かれている。モンテが 1900 年から 1901 年にかけてフランス政府からモロッコに派遣されたことと、マルドリユスが 1904 年に植民地省の援助でチュニジアに赴いたことは恐らく無関係であろうが、彼らはお互いを知っていたはずであろうし二人の『クルアーン』フランス語訳がその後約 20 有余年を経て同じ年に出版されたという事実はいずれにせよ興味深く、筆者らは今後このテーマを掘り下げる予定である。

¹⁸ キリスト教神学者のモーリス・ゴゲル（Maurice Goguel 1880-1955）による短い新刊紹介：*Revue d'histoire et de philosophie religieuses*, 5e année n°4, Juillet-août 1925, p. 396.

¹⁹ 因みに *Carnet E* の中で『クルアーン』の章・節の番号が明示されている箇所とモンテの訳とを比較したところ、共通する部分は次の一節しかなかった：第 96 章（アル＝アラク 凝った血）17 節「その一味を呼び集めさせなさい」。モンテ (p. 261) : Qu'il appelle son conseil ! ; マルドリユス (*Carnet E_005*) : Lors, qu'il appelle son répondant !

²⁰ Dussaud, R. (1934) : « Chronique », *Revue de l'histoire des religions*, Vol. 109, p. 253.

²¹ Nishio et al. (2022) の整理番号 M0009_16.

²² Delarue-Mardrus, L. (1938b) : « Mes mémoires: souvenirs littéraires : II », *Revue des Deux Mondes*, Vol. 44, No. 2, pp. 394-398.

3.3. 同時代人への言及

ステファヌ・マラルメの「火曜会」から始まるパリにおけるマルドリユスの交友範囲はかなり広く、最初の妻リュシーの『わが回想 I』²³では様々な文学者や芸術家との交流の一端を垣間見ることができる。事実、『カルネ』にはマルドリユスと交流があった多くの人々の名が記されているが、それについて詳らかに述べるのは別稿に譲るとして本稿ではまずマルドリユスが『千夜一夜物語』を献呈した文学者たちの中で『カルネ』で言及されているマラルメ、ポール・ヴァレリー、アナトール・フランスの三人についての言及を以下に紹介する。

(1) マラルメ

Carnet B_010 で「詩はホメーロスの逸脱以降道を誤った」としてリズムに蔓延る雄弁さを告発していたマラルメがホメーロス以前にあったとするオルフィスムについて、マルドリユスはそれと中国の絶句、日本の和歌や俳諧との隣接性を指摘している。

(2) ヴァレリー

「神秘と明晰さ」と題された Carnet A_059 の断章でマルドリユスはヴァレリーの意見として「真に神秘的（文学において、モラルにおいて、哲学において）であるためには、明晰のうちに、あるいは少なくとも明晰の追究のうちにあらねばならない。そうでなければ、安っぽい神秘である。」と記している。また音楽に関する Carnet A_083 ではスタール夫人の有名な言葉「音楽は音の建築である」にヴァレリーの「建築について」の次の一文²⁴を関連付けている：「目に見える諸形態と、連続する音の寸時の集まりとの、この不思議な近さ」。

(3) フランス

Carnet A_056 で、物質文明の発展によって精神文明が衰退するという危機感を持っていたマルドリユスは「痴呆の波が今の人間性を覆い潰しており、アナトール・フランスが危惧していたように、新たな中世期の到来があり得るように思える。」と記している。また Carnet A_081 でマルドリユスは、「ポール・ブールジェに関する A. フランスの引用」として「寛容、信仰、狂信、不寛容」の4語を記している。これは《ル・タン》紙 1936年1月25日付第3面文化欄に掲載されたジャック・リヨン（Jacques Lion 1888-1944、フランスを崇敬していた実業家）による「アナトール・フランスとポール・ブールジェ」という記事²⁵中のフランスの言葉を指しており、実際に「寛容 Tolérance」と「信仰 Foi」という語は出てくるが、後の二語は記事のなかには存在しない²⁶。

次に『カルネ』において名前が記され、多少なりとも言及されている「同時代人」をジャンル別（生年順）に以下に挙げる。

²³ Delarue-Mardrus, L. (1938a) : « Mes mémoires: souvenirs littéraires : I », *Revue des Deux Mondes*, Vol. 44, No. 1, p. 95sqq.

²⁴ Valéry, P. (1921) : *Eupalinos ou l'Architecte*, *Œuvres de Paul Valéry*, Vol. 1, 1931, p. 98, Sagittaire.

²⁵ Lion, J. (1936) : « Anatole France et Paul Bourget », *Variétés littéraires*, feuilleton du *Temps* du 25 janvier 1936.

²⁶ フランスがブールジェについて書いている概要は次のようなものである：寛容は貴重なもので、人はそれを信仰と引き換えに買う。従って、同時に信仰者であり、寛容であることは不可能である。信仰は決して潔白ではない。信仰を持つ人を私は恐れているが、羨ましくも思う。信仰は、おぞましいものに対する信仰であれ、幸福と平穏をもたらすからである。ポール・ブールジェは幸せでも平穏でもなかった。大きな不安が彼を捉えていたが、彼の詩における最良のものはそのような魂の状態から生じているのだ。

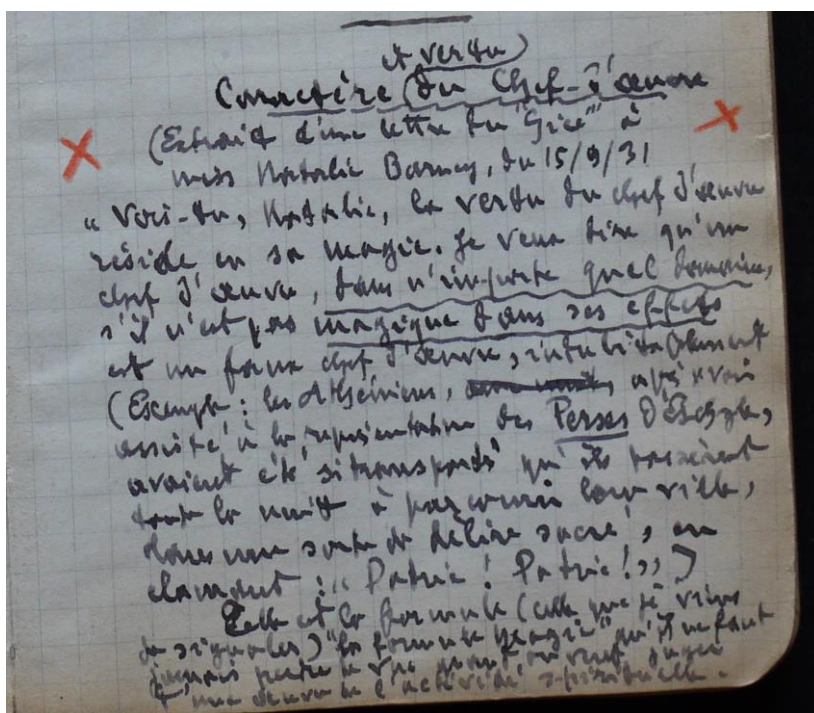
作家 : Rudyard Kipling (1865-1936)、Natalie Barney (1876-1972)、André Billy (1882-1971)、Henri Pourrat (1887-1959)

政治家 : Georges Clemenceau (1841-1929)、Raymond Poincaré (1860-1934)、Benito Mussolini (1883-1945)、Fayçal ben Abdelaziz Al Saoud (1906-1975)

芸術家 : Edgar Degas (1834-1917)、François-Auguste-René Rodin (1840-1917)、Claude Debussy (1862-1918)

神智学関連 : Helena Blavatsky (1831-1891)、Annie Besant (1847-1933)

その他 : Paul Gibier (1851-1900、細菌学者)、Charles Augustus Lindbergh (1902-1974)、Greta Garbo (1905-1990)



このうちリュシーが『わが回想 II』で最初の出逢いを語っている²⁷レズビアン作家ナタリー・バーネイについては、マルドリユスが彼女に送った1931年9月15日付の書簡の写し²⁸が Carnet A_080 に記してある(図6)。バーネイがマルドリユス夫妻と知り合ったのは、彼女が女性遍歴で世間を騒がせていた1900年代始めであるが、その後1910年にマルドリユス宅のすぐ近く(ジャコブ通り20番地)にあった「友愛の寺院」を貸借して『サロン』を主宰し、マルドリユスも「アマゾネスのサロン」と呼ばれたこのサロンの常連であ

図6 : ナタリー・バーネイ宛1931年9月15日付の書簡の写し

った。この書簡はマルドリユスのペダンティックな性格を表している好例であるが、バーネイのサロンに出入りしていた当時の様々な分野の人々とマルドリユスの間に交友関係があったであろうことを示唆している。

²⁷ Delarue-Mardrus, L. (1938b), *op.cit.*, p. 393.

²⁸ Caractère et vertu du Chef-d'œuvre

(Extrait d'une lettre du « Gicé » à Miss Natalie Barney, du 15/9/31

« Vois-tu, Natalie, la vertu du chef-d'œuvre réside en sa magie. Je veux dire qu'un chef-d'œuvre, dans n'importe quel domaine, s'il n'est pas magique dans ses effets est un faux chef-d'œuvre, indubitablement (Exemple : les Athéniens, après avoir assisté à la représentation des *Perses* d'Eschyle, avaient été si transportés qu'ils passèrent toute la nuit à parcourir leur ville, dans une sorte de délire sacré, en clamant : « Patrie ! Patrie ! »)

Telle est la formule (celle que je viens de signaler) « la formule de magie » qu'il ne faut jamais perdre de vue quand on veut juger d'une œuvre de l'activité spirituelle.

3.4. ナルシシズム

マルドリユスはカイロでアルメニア系移民の裕福な家庭に生まれ、ベイルートで中・高等教育を受けた後にパリで医学を修めるといふ生い立ちであったことから、彼の中でアイデンティティを巡る様々な葛藤があったことは想像に難くない。このことが影響したのかどうかは定かではないが、リュシーの『わが回想』²⁹ではマルドリユスの幾分ファナティックな振る舞いがしばしば述べられている。また『千夜一夜物語』の専門家であるマルガレート・シロンヴァル氏（元 CNRS 研究員）がマルドリユスの二番目の妻ガブリエル（Gabrielle Bralant 1897-1997）からの聴き取り調査から下した「稀代の menteur」という評価³⁰は、筆者がガブリエルの妹マドレーヌ（Madeleine Chesnais 1907-2006）から聞いた証言にあった彼の自我肥大傾向とそれに伴う虚言癖とも一致して

いる。それを例証するかのよう、マルドリユスが遺したコレクションに含まれる、自身や作品に関する多くの新聞記事や雑誌記事を切り取って貼り付けたスクラップブックでは、記事に記された自分の名前のすべてに青や赤の色鉛筆で下線が引かれており、これらのナルシスティックな性向は『カルネ』においても窺える。例えば、Carnet A_004 には紳士録に掲載されたマルドリユスの項目 2 点が図 7 のように切り取られて貼り付けてある。上の紙は Ruffy, G. (1908)³¹から切り取られたものであるが、現在入手可能な 1924 年版に記載されている項目（p. 509）³²とは異なることからこれは 1908 年版（p. 324）³³である。下の紙は公的出版された紳士録の 1933 年版に掲載されたものである³⁴。

また、マルドリユスは自身の名前である Joseph-Charles の頭文字（J.C.）に博士（Dr.）

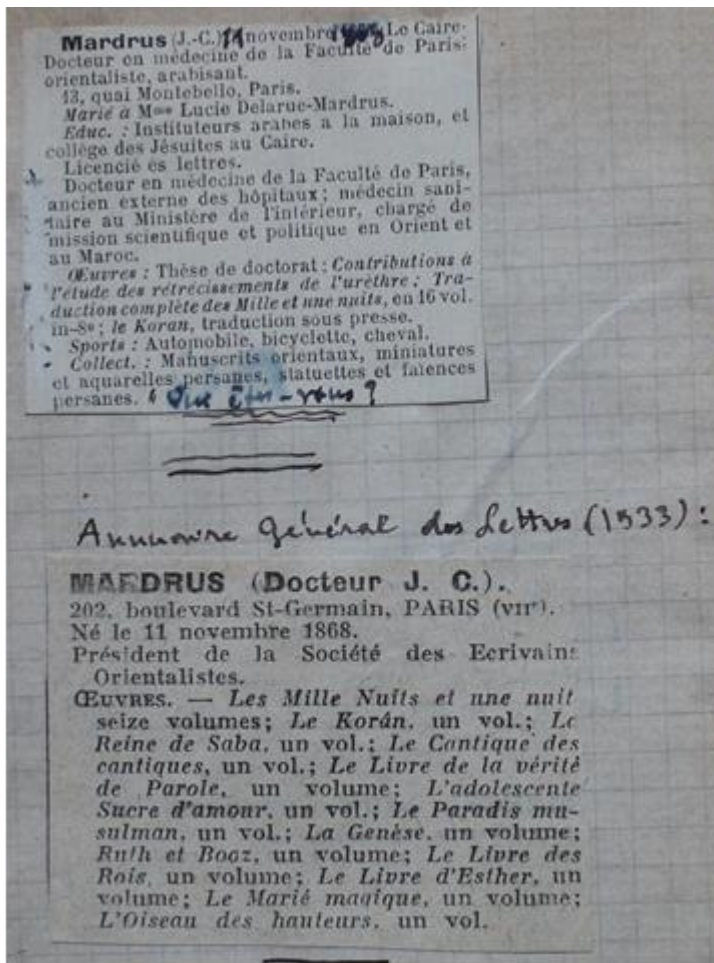


図 7：『カルネ』に貼られた紳士録の項目

²⁹ Delarue-Mardrus, L. (1938a), (1938b), *op.cit.*

³⁰ 筆者がシロンヴァル氏から直接聞いた。

³¹ Ruffy, G. (1908) : *Qui Êtes-Vous? 1908: Annuaire Des Contemporains, Notices Biographiques*, Delagrave.

³² 1924 年版では生年月日と配偶者名、『千夜一夜物語』の判型表記（8° : octavo）がなく、住所がサン＝ジェルマン大通りに変更され、作品に *La Reine de Saba* が追加されている。

³³ 1910 年版の項目（p. 337）も同一の記述であるが、『カルネ』の画像には紙片の右端に欄を区切る縦線が見えることから 1908 年版である。なおマルドリユスは生年月日の誤記（3 novembre 1875）を「11 novembre 1868」に直している。

³⁴ (Paris) (1933) : *Annuaire Général des Lettres, Huitième partie*, p. 1000. この書籍には著作者が明記されておらず、(Paris)はフランス国立図書館のリポジトリ（Gallica）の表記による。

を付けた署名を好んで使用し、さらにその「読み」である Gicé (/ʒise/) を使って自らを指すことが多かった。『カルネ』においても、ある言説や文献からの引用に Gicé を形容詞化、あるいは動詞化した表現を付加することによってそれらの追認や敷衍を示すという、「自身」を客体化するような箇所が散見された。該当する箇所は Carnet A で 55 箇所、Carnet B では 25 箇所あり典型的な例を以下に挙げる。

Idée absolument gicéenne (A_037), extrait Gicéisé (A_045), avec gicéisation (A_074), Moi, le Gicé (A_086), Mais gicéisé (A_112), plus ou moins gicéisé (A_148), pensée du Gicé (A_157), dit le Gicé (A_157), Gicéisé, clarifié (A_162), Gicéisé déjà (B_097), gicéisé assez (B_105).

3.5. 日本に関する記述

マルドリユスは 1895 から 1899 年まで海運会社「メサジュリ・マリティム Messageries Maritimes」で船医を勤め、この間に『千夜一夜物語』を書き上げている。「メサジュリ・マリティム」の広告リーフレットにはインド、インドシナ、フィリピンなどを経て香港から神戸と横浜への航路が示してあり³⁵、マルドリユスも日本に滞在したことがあると思われる。そのためマルドリユスが日本に関心を抱くのは当然であり、『カルネ』にも日本についての記述が見られる。

Carnet A_077 にはジョルジュ・ボノー (Georges Bonneau 1897-1972) の小説『三福』³⁶からの引用が 3 箇所あるがマルドリユスは表 2 のように部分的に書き直し (Gicéisé) ている。

表 2 : 小説『三福』の引用においてマルドリユスが書き直した箇所

原著 (p. 218)	Plus qu'un serpent vert, plus qu'un voleur, plus que l'incendie, les mouvements du cœur sont chose à redouter.
マルドリユス	Plus qu'un serpent vert, plus qu'un voleur, plus que l'incendie, redoutables sont les mouvements du cœur.
原著 (p. 68)	Et le Bouddha, voyant cela, lui dit: — Mon fidèle, parce que cette femme l'a offerte avec une grande foi, quand bien même on verserait sur elle l'eau des Quatre Océans, cette lumière ne s'éteindra point.
マルドリユス	Cette offrande (un peu d'huile à brûler devant le dieu), cette lumière, quand bien même on versait sur elle l'eau des Quatre Océans, elle ne s'éteindra point.
原著 (p. 51)	Son âme matérielle, qui siégeait dans le ventre, était allée au royaume d'en bas ;
マルドリユス	L'âme « immatérielle » qui siège dans le ventre, s'en alla au Royaume d'En Bas ;

³⁵ Branger, J. (1954) : « Messageries Maritimes. Courriers d'Extrême-Orient. Viet-Nam – Cambodge – Laos », Théo Brugière.

³⁶ Bonneau, G. (1934) : *Aux trois bonheurs, ou le Japon de la tradition*, 1934, Plon. ボノーは日本文学の専門家で九州帝大、京都帝大の教授、また関西日仏学館 (京都) の第二代館長を務めた。『三福』は彼自身が住んだ博多の花街を舞台として日本女性の生き様を描いた小説であり、原著の表紙に「三福」という漢字が縦書きされている。

マルドリユスの日本への言及は Carnet B_011 にまとまって記されている。図 8 は当該部分（左側の d）以降）の画像であり、翻刻したテキストを注で示す³⁷。マルドリユスによる日本への言及は『カルネ』の他の箇所にも見られるがそれらについては別稿で論じる予定である。

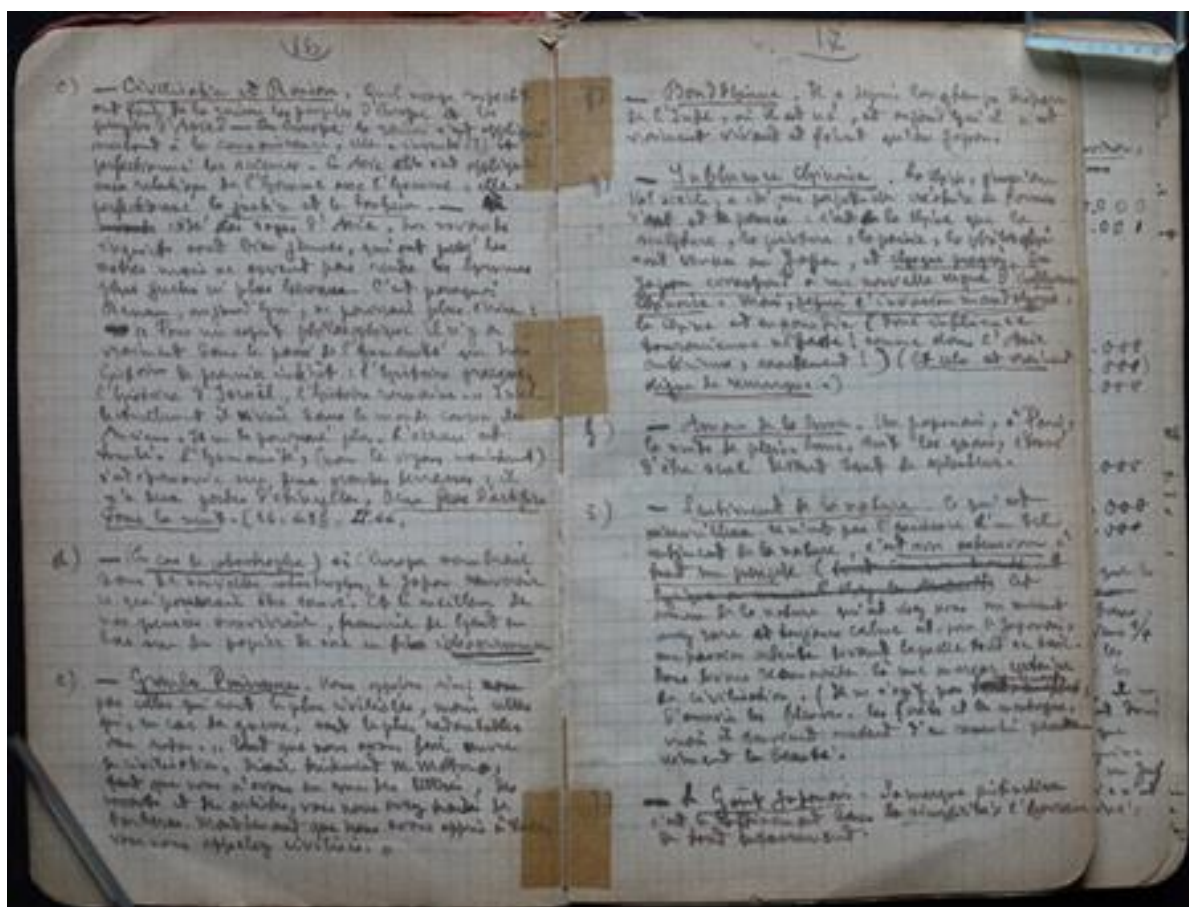


図 8：日本についての言及（Carnet B_011）

³⁷ d) – (En cas de catastrophe) si l'Europe sombrerait dans de nouvelles catastrophes, le Japon sauverait ce qui pourrait être sauvé. Et le meilleur de nos pensées survivrait, transcrit de haut en bas sur du papier de soie en fins idéogrammes.
 e) – Grandes Puissances. Nous appelons ainsi non pas celles qui sont le plus civilisées, mais celles qui, en cas de guerre, sont le plus redoutables aux autres. « Tant que nous avons fait œuvre de civilisation, disait tristement M. Malton, tant que nous n'avons eu que des lettrés, des savants et des artistes, vous nous avez traités de barbares. Maintenant que nous avons appris à tuer, vous nous appelez civilisés. »
 f) – Bouddhisme. Il a depuis longtemps disparu de l'Inde, où il est né, et aujourd'hui il n'est vraiment vivant et fécond qu'au Japon.
 g) – Influence chinoise. La Chine, jusqu'au 16e siècle, a été une perpétuelle créatrice de formes d'art et de pensée, c'est de la Chine que la sculpture, la peinture, la poésie, la philosophie sont venues au Japon, et chaque progrès du Japon correspond à une nouvelle vague d'influence chinoise. Mais, depuis l'invasion mandchoue, la Chine est engourdie (donc influence touranienne néfaste ! comme dans l'Asie antérieure, exactement !) (Et cela est vraiment digne de remarque.)
 h) – Amour de la lune. Un Japonais, à Paris, les nuits de pleine lune, suit les quais, étonné d'être seul devant tant de splendeur.
 i) – Sentiment de la nature. Ce qui est merveilleux ce n'est pas l'existence d'un tel sentiment de la nature, c'est son extension à tout un peuple. Cet amour de la nature qui est chez nous un sentiment assez rare et toujours calme est, pour le Japonais, une passion ardente devant laquelle tout se tait. Nous devons reconnaître là une marque certaine de la civilisation. (Il ne s'agit pas seulement d'asservir les fleuves, les forêts et les montagnes, mais il convient surtout d'en ressentir passionnément la beauté.)
 j) – Le Goût Japonais. Sa marque distinctive c'est le raffinement dans la simplicité, l'horreur de tout entassement.

4. おわりに

本稿はマルドリユスの未公開手稿『カルネ』の翻刻と分析を行うプロジェクトの中間報告として、概要と現時点で得られた幾つかの知見について述べた。『カルネ』4点の翻刻作業はほぼ終了しているが判読不能の箇所が未だに多く残っており、それらの未解読テキストを出来るだけ多く確定することが今後の最重要課題である。

本稿で報告した知見は限定的なものではあるが『カルネ』の資料的な価値が改めて認識され、また他にも興味深い点が幾つか見受けられた。その中で今後の研究において重要な鍵となるのは、文学者・東洋学者のマルドリユスがしばしば唐突に見せる科学的思考の発露である。医師でもあったマルドリユスが『カルネ』の随所に科学的な記述を含めるのはごく自然なことであろうが、あるテーマ（その多くは文学、東洋学関連である）を扱う際の階層構造化された記述群の中に、テーマとは直接的には結びつかないものの、何らかの意味において関連する科学分野の記述が少なからず見られた。さらにはそれらの記述の中に、特にエジプトを含む中東世界、つまりオリエントへの言及が混在している例が数多くあり、マルドリユスが自らの起源とも言えるエジプトに対して抱いていた強いこだわりが感じられる。それがアイデンティティを巡る葛藤から生じた起源への郷愁の表れであるとするのは早急かつ過剰な解釈であるかも知れないが、そのような拘泥に加えて、上述した自己客体化を伴うナルシスム、さらにはしばしば見せるペダンティスムも相俟って彼は自らのうちに、文学的なるものと科学的なるものがせめぎ合う思考方法についてある種の自己矛盾を感じていた可能性がある。そしてそれらの諸々の要素が私的な覚書である『カルネ』の随所で「不明確なテキスト構造」を生じさせているものと思われる。

このようなマルドリユス独特の知的情報構造とでも言うべきものの形式的特徴を明らかにするため本プロジェクトでは今後、『カルネ』における全使用語彙を計量的に処理してそれらの間の相互的な結合関係、つまり距離の近さに基づく語彙ネットワーク構造の可視化を行う予定であり、それによって『カルネ』における記述の配置を模倣的に最適化することを試みる³⁸。

謝辞

本稿の執筆に際し、マルドリユスのアラビア語能力に関して次の方々から貴重なご意見を賜った：堀内正樹氏、宇野昌樹氏、荻谷康太氏、大坪玲子氏、熊倉和歌子氏。末尾ながら心からの謝意を表する次第である。

参考文献

小田淳一 (2003) : 「マルドリユス・コレクションに関する予備調査報告」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』 18, pp. 163-175.

³⁸ 『カルネ』のテキストの分析と並行して、筆者（小田）が2003年にマルドリユスの義妹であるマドレーヌ・シェネ氏（2番目の妻ガブリエルの妹）とその娘マリオン・シェネ氏に行った約3時間強に亘るインタビューの分析を現在行っており、そこから補足的かつ重要な情報を得られる可能性がある。

- Bonneau, G. (1934) : *Aux trois bonheurs, ou le Japon de la tradition*, Plon.
- Branger, J. (1954) : « Messageries Maritimes. Courriers d'Extrême-Orient. Viet-Nam – Cambodge – Laos », Théo Brugière.
- Chauvin, V. (1905) : « Les Mille et une Nuits de M. Mardrus », *Revue des bibliothèques et archives de Belgique*, Tome III, fasc. 4, pp. 290-295.
- Delarue-Mardrus, L. (1938a) : « Mes mémoires: souvenirs littéraires : I », *Revue des Deux Mondes*, Vol. 44, No. 1 (1er mars 1938), pp. 71-107.
- Delarue-Mardrus, L. (1938b) : « Mes mémoires: souvenirs littéraires : II », *Revue des Deux Mondes*, Vol. 44, No. 2 (15 mars 1938), pp. 385-414.
- Dussaud, R. (1934) : « Chronique », *Revue de l'histoire des religions*, Vol. 109, p. 253.
- Goguel, M. (1925) : « Notice biographique », *Revue d'histoire et de philosophie religieuses*, 5e année n°4, Juillet-août, 1925, p. 396.
- Huart, Cl. (1925) : « NOTES BIBLIOGRAPHIQUES », *Revue Historique*, T. 149, Fasc. 2 (1925), pp. 270-271.
- Julien, Ch.-A. (1926) : « NOTES BIBLIOGRAPHIQUES », *Revue Historique*, T. 152, Fasc. 1 (1926), p. 117.
- Lion, J. (1936) : « Anatole France et Paul Bourget », Variétés littéraires, feuilleton du *Temps* du 25 janvier 1936.
- Mardrus, J.-C. (1925) : *Le Koran, qui est la guidance et le différenciateur*, Traduction littérale et complète des Sourates Essentielles, Fasquelle.
- Montet, E. (1925) : *Le Coran*, Traduction et choix de sourates, Payot.
- Nishio, T., Okamoto N., Oda, J., Sironval, M., Chesnais, M., Kaji, Y. (2022) : *Catalogue du fonds, Joseph-Charles Mardrus, traducteur des Mille Nuits et Une Nuit*, Abencerage.
- (Paris) (1933) : *Annuaire Général des Lettres*, Huitième partie.
- Stead, E. (2015) : « JOSEPH-CHARLES MARDRUS: LES RICHES HEURES D'UN LIVRE-MONUMENT », *Francofonia*, No. 69, pp. 105-125.
- Valéry, P. (1921) : *Eupalinos ou l'Architecte*, *Œuvres de Paul Valéry*, Vol. 1, 1931, pp. 67-191, Sagittaire.
- Ruffy, G. (1908) : *Qui Êtes-Vous? 1908: Annuaire Des Contemporains, Notices Biographiques*, Delagrave.

(おだ じゅんいち / 東京外国語大学名誉教授)

(シュルファ セリア / EHESS, étudiante en master 2 de recherche)

(ダーイフ ラハセン / リヨン第2大学 ingénieur de recherche)